

都市出版『外交フォーラム』NO.153(2001年4月号)掲載

【書評】

『BOKASSA Premier : un Empereur français』

スティーブン・スミス、ジェラルディーヌ・フェズ共著

カルマン・レヴィ社 2000年3月

評者 片岡貞治

グローバルイシューズ(欧州・アフリカ) 研究員

1998年、フランスは100年に亘る軍事プレゼンスに終止符を打ち、中央アフリカにおける駐留仏軍基地を閉鎖し、中央アフリカから離れた。この100年の仏の軍事プレゼンスの間で、一体何が行われていたのか、滑稽なキャラクターの持ち主であり、何処かに悲壮感を漂わせていた一人のアフリカの暴君が、如何に、他の多くのアフリカの軍事独裁者以上に世界の注目を集め得たのかという素朴な疑問に対する回答がこの本の主題である。

1966年にクーデターで政権を取り、76年に皇帝となり、アフリカに深い関係を有するフランス人の助けによって馬鹿げた「戴冠式」を行い、80年には仏軍によって政権から引き摺り下ろされたボカサの悲喜劇を、著者は様々なエピソードや公式文書などを交えて物語る。自らの影響力のある地域での共産主義勢力の拡大や威信の低下を惧れる余り、フランスは、誰の目にも明らかな、アフリカの独裁者の逸脱した行為にまで目を瞑り、せっせと支援を行っていったのである。

この本は、現在「ルモンド」紙のアフリカ担当記者スミス(米国人)とアフリカ専門フリージャーナリスト、フェズ(スミスの配偶者)によって書かれたジャン・ベデル・ボカサ(中央アフリカ元大統領)の最初の伝記である。本書の企画は93年に遡る。フェズは、ボカサが出所した93年より、ボカサと独占的な夥しい数のインタビューを行うことが許された唯一の記者であった。本書は、ボカサの人生に関わった人々の多くの証言を基に、駐留仏軍の一介の幼年学校の生徒から、仏軍の士官、終身大統領、元帥、皇帝にまで上り詰め、「キリストの13番目の使徒」と自称するに至った後、クーデターで失脚し、死刑判決を受け、7年の服役の後、出所し、人知れず静かなる死を遂げた一人の人間の波瀾に富んだ人生を描いた出色の人間分析書である。本書はフランスと仏語圏アフリカ諸国の間に存在した、数々の政治軍事陰謀、癒着、裏切り等といった仏・アフリカ関係の暗闇の部分への入念なる調査を行った良質のアフリカ研究書ともなっている。

